

ことばと発達障害

久 留 一 郎

鹿児島大学教育学部 臨床心理学

1. 問題—人間的・発達の状況としての歯とことば—

筆者の臨床心理学的立場では、「障害」を「部位」としてのみとらえるのではなく、その子どもの人間全体の中に意味づけることを重要視している。歯や話しことばに関しても、同様なことがいえる。たとえば、上の前歯が出っばってきた時に、指しゃぶりとの関係が深いことがある。指しゃぶりは、その子どもの性格行動といった人間的状況と密接な関連性を有している。親子関係を中心に、家族力動の中で、子どもの性格形成がなされ、その結果として、指しゃぶり（爪かみ、ものかみ等）が形成され、さらに、その次の結果として「歯列不正」をまねくことは臨床的によく知られていることである。歯だけの障害として、すなわち、障害を部位としてのみ焦点をあててとらえるのではなく、その子どものパーソナリティ（自我）形成、親子関係（家族力動）のあり方と関連づけて理解し、アプローチしていかねばならないことになる。また、発達の観点に立てば、指しゃぶりにしても、2～3歳の場合と5～6歳以降の場合とではその意味がちがってくる。前者は発達過程において、全般的に、一過性的に出現してくる傾向があるし、後者は心理的な問題をはらんでいることが多く、その結果が、現象としての「出っ歯」を形成することになる。同様な現象は、話しことばやその他の行動に関しても共通に出現してくる。最近、「話さない」、「学校に行かない」という子ども（選択性緘黙、登校拒否）が、児童臨床では問題になることが多い。「話さない」子どもを例にとると、「話せない」子どもとして、治療しようとし、ますます症

状を悪化させたケースに出会うことがある。「話さない」子どもは、臨床的に洞察してみると、その子の自我の状況と対人関係状況との絡みの中で、「話すか話さないか」を心理的に選択していることがわかる。すなわち、その子どものきわめて人間的な状況が、「話さない」という現象として、出現してくるのである。その子どもにとっては、「話さない」という状態像を有することで、対人的場面での自我の不安状況を防衛しているのである。したがって、「話さない」子どもへのアプローチは、その子どものパーソナリティ全体が変化変容（自我構造の再体制化）するような、人間学的心理療法が意味を有することになる。その子どもの全体的な人間的变化がなされた時にこそ、彼はどのような対人的状況でも、自己実現的に存在し、話すこと（自己の表現）へのためらいやもたつきは消失していくのである。したがって、歯の状態にしても、ことばの状態にしても、その子どもの発達の状況や人間（自我）的状況との意味脈絡の中で、洞察的に、心理力動的に把握し、人間全体へアプローチしていくことが重要視されねばならないだろう。換言すれば、歯には「こころ」が存在しており、単なる「もの」ではない。ことばに関しては、言わずもがなのことである。

2. ことばの発達

(1) ことばの機能とその意味

話しことばは一般的に、コミュニケーションの手段や道具として考えられているが、臨床心理学的には、その人の情緒発達や、自我形成や、知的機能などと深

い関連性があることに注目しなければならない。ヴァン・ライパー (Van Riper, C.1963) は、話しことばの機能をわかりやすく分類しているので参照し、心理学的に考察してみたい。

① 思考としての話しことば

言語獲得期にある子どもの思考過程は、発語器官の運動と話しことばの同時的表現 (一種の音響的信号) に依存しているといわれる。2~3歳の幼児のあそび行動を観察してみると、具体的動作にともないながらしきりにおしゃべりをしている (思考している) 様子が見うけられる。このことは、逆に、話しことばが未発達であったり、障害がある場合、思考過程の発達が遅滞することが考えられるので、注意しなければならない。

② コミュニケーションとしての話しことば

話しことばの重要な役割であり、人類における、もっとも特有な行動現象といってもよい。現代という情報社会においては、きわめてたかく、この機能が要求されている。

③ 操作的道具としての話しことば

未分化ながらも、ことばを獲得した子どもは、シンボリックに特定の音 (ブーブー、マンマ) を発することにより、母親を呼びよせて何かしてもらうことで、自己の欲求や情緒的な気持を実現することができる。すなわち、人を動かすことや自己の環境調整のために「魔法」の道具として、話しことばを使用し始めるのである。

④ 情緒や自我表出としての話しことば

話しことばには、人間の自然でいきいきとした感情表現がこめられている。このことは、情緒障害をもつ子どもたちに、何らかの話しことばの障害 (緘黙児や自閉児など) があることをみれば、話しことばと感情・情緒の関連性の深さをうかがい知ることができる。また、話しことばには、自我表出としての機能があり、その人らしい意味をもったことばの表現があり、対人関係的に重要な意味を有している。自我表出のあり方が不適応状況にあると、緘黙症などの症状が出現してくることは臨床的によく知られている。

次に、話しことばの特徴をあげてみると、第一には模倣し、学習していくものである。したがって、ゆたかで適切な言語刺激の環境が重要な意味をもつことになる。第2には、話すための口腔器官の運動は、無意識で自然に行なわれる時、健全な状態なのである。話すことが不自然に意識されたり、無理な矯正をうけたりすることは、ことばの健康上このましくない。第3

には、パーソナリティと深い関係を有していることである。自我形成上の問題や対人関係上での問題が絡み合うことはすでにのべたとおりである。第4には、話しことばはレジャー活動といわれる。心理的にも身体的にも病理的状态となると、話すための活動エネルギーは低下してくる。すなわち、心身ともに、バランスのとれた健全な状態を保持する時、ことばの活動は促進されるのである。

(2) ことばの発達とその過程

話しことばの発達には個人差がみられるが、発達のプロセスには共通性がみられる。発達段階にみられる特徴的なことばの様相を、心理学的に考察してみる。

① 1歳未満の発達状況

3ヶ月頃になると、首もすわり、まわりの刺激環境にも反応しようとするようになる。いわゆる「社会的笑い」が出現し、基本的な対人関係がめばえる。ことばに関しては、「クーイング」の時期といわれ、「アーアー、ウーウー、クークー」などの音声やしきりに発せられる。6ヶ月頃になると、喃語が頻繁に発せられ、「バブリング」の時期といわれる。自己刺激的に、いろんな音をくり返し、音声あそび的な様子がみられる。運動機能的にはお座りが可能になり、発語器官としては乳歯がはえ始める。また、この頃、人みしりが始まり、対人関係も分化し、模倣能力も発達し、いくつかの芸などをよろこんでするようになる。9ヶ月をすぎると、はいはいをしたり、つかまり立ちをしたり、運動機能はさらに分化してくる。音声の模倣も、具体的な現象と結びついて発声するようになる。一歳ちかくになると、模倣能力は一層、明確になり、反復して発声することが多くなり、いわゆる「エコラリア (オーム返し)」の時期とよばれる。

② 満1歳から2歳の発達状況

理解言語は急に増え始め、満1歳の誕生日頃にはいくつかの話しことば (表出言語) がみられるようになる。[p], [b], [m]の両唇破裂音を中心とした「マンマ、ママ、パパ、ブーブー、バイバイ」などが出現し、一語文が可能になる。1歳4~5ヶ月になると、「ジャーゴン」の時期といわれ、「さえずり」ことばがしきりに発せられる。2歳ちかくになると、「ママ、ダッコ」などの二語文があらわれてくる。表出言語の量は、1歳6ヶ月頃は、約30語であるが、2歳頃には、約200~250語の使用が可能となる。

③ 2歳から3歳の発達状況

二語文から多語文へと発達していく時期である。自我の発達もめざましく、いろんなことをしきりにたず

ねたり、探索活動をしたり、認知能力もたかまわって行く。この時期には、話そうとする意欲や、表現したいという気持ちがつよくなる反面、その表現方法や発音(構音)の未熟さのため、会話がつまづきがちになり、どもり様の現象が一過性的に出現することがある。この場合、親が過敏になり、そのどもり現象に対して、干渉、矯正しようとするとなますますことばのつまづきがひどくなることもある。子どもが表現しようとしているその気持ちによく耳をかたむけて、その意味内容をゆっくりとくり返し(反射)てあげることが重要である。3歳ちかくなると、ことばは急に増え、約1000語になる。

④ 3歳から4歳の発達状況

いわゆる自我意識が明確になり、自己主張が頻繁にみられる(第一反抗期)。親からみれば「イヤ!」、「ダメ!」などのことばが気にかかり、いかにも反抗的に思われる。発達過程の一つの現象であり、パーソナリティ形成上、重要な時期である。ことばは、約1500語に増える。

⑤ 4歳から5歳の発達状況

幼稚園などの社会的集団に参加する時期であり、ことばもほぼひとり前になる。5歳前後には、約2000語のことばを獲得するようになる。日常会話におけるほとんどの基本語を使用することが可能になる。また、この頃より、文字言語に関心を示し始める子どもも多くなる。

以上、要約的に子どもの一般的な発達状況を示してきたが、2~3歳すぎてもことばの遅れがひどいと思われる時は、専門的な臨床家に相談を受けることがのぞましい。また、前述したごとく、ことばは現象としてあらわれている「結果」であることが多いので、ことばの発達と深い関連性をもつパーソナリティの問題に視点をあて、力動的に把握することが治療的意味を深めることになる。

(3) ことばの障害

言語障害には、様々な種類があり、分類上も原因論的であったり、治療教育的立場であったり、幾分、変わってくる。ここでは、一応、一般的に用いられているものを紹介してみる(表1)。

筆者の見解では、⑦の自閉症に関しては、言語認知障害説の立場が主張されてきているおりでもあり、別のカテゴリーを設定すべきであると考えている。なお、言語障害の出現率に関しては、約5%であるといわれており、公立学校等での言語治療教室も、最近はかなり充実してきているようである。しかし、問題となる

表1 言語障害の分類(田口恒夫)

- | | |
|---|------------------------------|
| A | 耳で聞いた特徴に基づいて： |
| ① | 構音障害(調音の異常) |
| ② | 話し声の異常(音声障害) |
| ③ | 話しことばのリズムの異常(どもり、早口症など) |
| B | ことばの発達という立場から： |
| ④ | ことばの発達の遅れ(言語発達遅滞) |
| C | 原因または伴っている病気からみて： |
| ⑤ | 口蓋裂に伴うことばの異常 |
| ⑥ | 脳の言語中枢が犯された結果起こる言語機能の異常(失語症) |
| ⑦ | 情緒的要因で話さない子ども(緘黙症・自閉症など) |
| ⑧ | 聴覚障害(ろう・難聴)に伴うことばの異常 |
| ⑨ | 脳性まひに伴うことばの異常 |
| ⑩ | その他 |

のは、就学前の子どもの言語治療体制が貧弱なことであり、言語獲得期にある幼児にとっては、きわめて重要な発達課題であることを忘れてはならない。行政的な立場からも、国際障害者年をきっかけにして、発展的な方向で、早急に解決がのぞまれるところである。

3. ことばの発達援助と親のかかわり

(1) 子どものパーソナリティ

子どものパーソナリティは、まだ、全体的に未分化であるだけにとどまらず、大人とは若干、異った構造を有している。ゴッツシャルトのパーソナリティ形成の層理論によると、「運動・感覚、感情・情緒、意志・欲求、社会性(対人関係)、知的機能(言語機能)」の層が、下層から徐々に分化し、上層へ向って発達して行くことをのべている。子どもの発達過程においては、特に、感情・情緒の層がゆたかに、適切に刺激されることが、臨床的にはきわめて重要である。この層が貧弱であると、上層の機能も未分化の状況にあり、特に言語機能の発達は障害をこうむることになる。情緒障害といわれる子どもが、何らかのことばの障害を有するのは、先にも述べたとおりである。したがって、子どものパーソナリティ形成からみると、まず、情緒的発達が促進され、自己表現力が高まると社会性(対人関係)が発達して行く。その結果、ことばの発達もうながされることになる。子どものことばの障害にのみ

接近しても治療的には意味がうすいのはこの所以である。さらに言うならば、子どもの発達障害の治療は、基本的には、情緒障害の治療と同様の意味をもつのである。

(2) 子どもの心理的世界

人間であればだれでも、他者に愛されたい、認められたい、自分でやりとげたい、自己を主張してみたい、思いっきり活動したいという心理的欲求をもつ、これらの心理的条件が受け入れられている時、子どもの心理的世界(情緒的世界)はエネルギーにあふれ、自己実現のためのエネルギーは充実しているのである。マズローは、生理的欲求に次いで、心理的欲求として重要視している。子どもは大人よりも情緒的世界に支配されており、理性的コントロールが未分化な状況にある。したがって、これらの欲求(愛情、承認、成就、独立、探索)が受容されている時、健康への必要条件が満たされており、障害への克服にたち向うことができるのである。家族力動という親子関係の中で、これらの基本的欲求がどのように受容——拒否されているかで、発達——遅滞の状況が出現してくるのである。

(3) 大人としてのかかわり

子どもはどのような世界にすんでいるか、子どもが成長するための基本的心理は何か、ということでも理解されてきたように、大人としてどのようなかかわりをもてばよいのかもうすこし考察してみたい。それは第一に、子どもの状態像を「ありのままに、正確に理解する」ことである。子どもは、成長するにしたがい自分の障害に対して過敏になりがちである。まわりの大人が、その障害に対して評価的態度をもつと、子どもは反応的關係しか示してくれない。大人の評価の軸(レベル)に対して反応しているのであり、真の自分をあらわしているのではない。この時、子どもは、自己を偽った、いわゆる虚像として存在することになる。障害の部位にのみ、大人が焦点をあてると、子どもは実像として存在できなくなる。大人が、ただ、ありのままに、正確に(評価することなく)人間として理解することで、子どもは、障害にこだわることなく、自分を発揮し始め、自己実現的になっていくのである。第二に、子どもが表現しようとしている気持(情動)を了解し、共感して、その認知された意味内容を相手の子どもの「反射」することである。子どもは未分化で、コントロールされていない自分の世界を、大人をとおして洞察していくのである。子どもの世界が、正確に、ありのままにうつる「鏡」となることである。大人の「鏡」が歪んでいたり、くもっていたりしては

子どもは自己像を正確に理解できない。子どもが自己像を確立していく時、自己実現的に存在するようになるのである。第三に、子どもの発達のペースを尊重することである。子どもが障害という状態像にあることは、心理的には、何かにつまづき、もたついている状態である。彼らが自分の力で歩き、走ることでできるペースは各自、ことなっている。画一的で機械的な基準から、子どもの発達状況を無理じいしても、発達のスピードは加速できないどころか、逆にスピード・ダウンしてしまう。まわりの大人が、あせりや不安定な情動世界にある時、この様な現象が生じる。子どもの発達のペースは、レースに例えれば、マラソンのペースであり、車に例えれば、500ccの車や2000ccの車により、障害という山道を走るのには、それぞれのエンジンに応じたペースがあるのと同じである。子どもたちは、自己の発達のペースに応じた走り方が認められた時、障害を見事に克服して、ゴールにたどり着くのである。

おわりに

いずれにしても、子どもの発達障害が心理的に、人間的状況として克服されていくためには、大人の側の心理的成長が重要となる。障害をせおっている人間が自己実現的に変化・変容していくためには、かかわる側の人間の自己実現がなされていることが必要不可欠となる。また、人間そのものへ接近する者は、人間に対する哲学(人間観、治療観、発達観)を有していなければ、治療のためのテクニックも、真の発達援助にはなりえない。すなわち、われわれ自身の自己成長が厳しく問われるのである。国際障害者年の春に。

参考・引用文献

- 野西恵三監修、久留一郎他編「障害児臨床と発達援助」協同出版、1980。
- 久留一郎「教育と医学」教育と医学の会編 1980, No.5。
- Vav Riper, C.「Speech Correction; Principles and Methods.」Printice-Hall, 1963。
- 森上史朗他編「話しことばの家庭治療」日本文化科学社、1970。
- 田口恒夫、「言語治療学」医学書院、1966。